

70 熊宗立伝―判明した生没年

○小曾戸 洋・王¹⁾ 鉄策²⁾

日本最初の印刷医書『医書大全』、日本第二の印刷医書『勿聴子俗解八十一難経』はいずれも明の熊宗立の著である。熊宗立は建陽(福建省)の人で、儒と医を兼ね、出版事業家でもあった。すなわち医書・儒書など自己の著述も含め、すこぶる多くの書物を刊行し、子孫の熊氏一族も福建における屈指の出版家として活躍した。

十五〜十六世紀、日本の医学に影響を与えた人物として、熊宗立に比肩しうるものはいない。福建は日明貿易の一大拠点であり、日本に対する文化的影響は大きく、熊宗立の所業も、当の中国よりはむしろ日本の医学に色濃く反映されることとなった。医学・儒学・出版事業を兼ねた熊宗立の職業形態までもが、堺の阿佐井野宗瑞の手本とするところとなり、ひいては吉田宗恂(角倉了以の

弟)や曲直瀬玄朔らの活字医書出版活動へとつながっていったのである。当時日本で用いられた新渡来医書の多くは、熊宗立の刊行にかかるものである。

熊宗立の出版活動がその後世に及ぼした影響についてはすでに論考した(拙稿『名方類証医書大全』解題・エンタプライズ・一九八九)が、従来、熊宗立の伝に関してはまとまった資料がなく、生没年も明らかでなかった。ところが、最近、中国でそれが出現したのである。

当該資料は建陽に在任する熊宗立の末裔、熊徳留氏(建陽市書坊郷の製茶工場長を定年退職)の所持している『潭陽熊氏宗譜』(清刊木活字印行)で、そこには熊宗立の肖像画賛・伝・家系などが詳記されている。伝の記載は次のとおりである(原漢文を訓読)。

「宗立。礼公の三子、行は華の十三、字は道宗、道軒と号す、又た勿聴と号す。永樂七年己丑(一四〇九)七月初七日に生まれ、成化十八(一七の誤か)年辛丑(一四八二)に終はる。寿を享くること七十三歳。錢塘焦湖山に葬り、異に座し乾に向かふ。継妣は陸氏、位は福八。正月初二日生まれ、十二月初十に卒はる。蔡埜に葬る。俱に碑あ

り。公生まれながらにして学を嗜み、孝友に善し。業を劉刻仁齋先生の門に受く。嘗て易を読み、陰陽の奥秘を悟り、遂に精尅して祖父の医術を挾襲す。皆、酌を計らず、一に人に事ふるを以て心と為す。著に小学集解・通書大全・脈訣・難經・活人指掌・婦人良方・医方大全・居家必用等の書有り、世に行はる。載せて建陽県誌に在り。妣は余氏。位は甲八。公に長ずること三歳、丙午の年五月初二日生まる」。

肖像に付された賛詩は次のとおり。

「医伝世業、徳振儒宗、発明小学、洞徹陰陽、博施濟衆、惠及穹壤、光風霽月、千載流芳。建寧府儒学教授任善贊」。

宗立の子には瑗（二四三六～一五〇八）がおり、瑗の子には天玄・天育・天賜の三子がいて、天育（二四五八～一五四三）が嗣子となり、以降、歴代続いた。

上記『潭陽熊氏宗譜』の記載によって、熊宗立の生没年は一四〇九年～一四八一年であることが確定した。かつて筆者は、その活動情況および伝存資料から生年は永樂年間（二四〇三～二四））、没年は成化年間（二四七五～八七）であろうと推したが、幸い当を得ていたようである。

ちなみに、半井明親は永正中（二五〇四～二〇）に入明して熊宗立について学んだと伝えられ、筆者は疑問をはさんだが、これによってそれが誤伝であることが明らかとなった。

資料を提供して下さった福建省建陽市の武夷山朱熹研究中心の方彦寿氏に謝意を表す。

(1) 北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究室

(2) 中国黒龍江中医薬大学医史教研室